HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	知里真志保の描いたアイヌ学の構図
Author(s)	加藤, 博文
Description	生誕百周年記念シンポジウム「知里真志保 人と学問」. 平成21年2月22日. 札幌市.
Citation	知里真志保 人と学問 : 生誕百周年記念シンポジウム予稿集, 27-31
Issue Date	2009-02-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38287
Type	conference paper
File Information	4_27-31.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

知里真志保の描いたアイヌ学の構図

加藤　博文

はじめに

知里真志保のアイヌ語研究に残した功績は、述べるまでもなく大きなものがある。しかし既に多くの人々が指摘しているように、その論の及ぶ範囲はひとつ言語学に止まることなく、アイヌ民族誌やアイヌ史にも及んだ。早すぎるその死のために形となることはなかったが、もし出版が企画されていた岩波新書『アイヌ』がまとめられていたならば、われわれは知里真志保の描いていたアイヌ学の全体像を知ることができたであろう。

残された知里真志保の著作を辿ると、彼にとってのアイヌ語が言語学の枠を超えて、アイヌ民族の歴史や精神世界をその射程に入れたものであったことを知ることができる。彼にとってのアイヌ語は、知里アイヌ学へ接近するための方法としての言語学であったのではないかと思われるのである。

本報告では、若き日の知里真志保を取り巻いた人々の知里真志保に期待したものとはなんであったのか、1920年当時のアカデミズムのアイヌ民族への視線について考察を試みたい。次いで樺太時代から戦後の知里真志保の著作を辿ることで、彼を取り巻くアカデミズムの雰囲気に対する知里真志保の苦悩と、彼の目指したアイヌ学の構図を探りたい。そして最後に彼の軌跡から、そして近年、意識的に論じられるようになった先住民族と研究の関係、研究倫理の問題に言及することで、知里真志保の望んだ「アイヌ研究を正しい軌道にのせるために」という思いに近づきたいと思う。

１．若き日の知里真志保を取り巻いた人々

知里真志保が東京帝国大学文学部において学ぶようになる経緯は、すでに多くの彼について書かれたものの中で触れられている（藤本 1970; 湊 1982; 丸山 2002 ほか）。当時、アイヌ研究に関心をもっていた研究者たちに知里真志保の存在を知らしめたのは、1927（昭和 2）年に室蘭中学に在籍中であった彼が英語教師であった榎俊三郎に勧められてまとめた「山の刀禰濱の刀禰物語」であった。これは編集者から金田一京助のもとへと届けられ、『民族』第二巻第四号および同第五号に掲載されることとなる（知里 1927）。その後の彼を取り巻く動きからは、如何にこの彼の最初の著作に驚かされ、彼の存在に敏感に反応したのかを知ることができる。

室蘭中学を卒業し、幌別の役場へ勤めていた知里に対して、更に進学して学ぶように働きかける動きは、二つの方向からあったことが知られている（藤本 1970）。一つは、『アイヌ神謡集』の出版で姉知里幸恵とのつながりを有していた金田一京助によるものであり、もう一つは、当時東北の蝦夷研究からアイヌ史研究へ関心を寄せていた喜田貞吉によるものであった。彼ら二人の知里真志保に寄せた期待には、当時の研究者のアイヌ民族の置かれた立場と研究対象としての接し方が良く示されている。これは、やがて知里がアイヌ語学に関わり、口承伝承や民族誌を収集する過程での苦悩と深く関わっていくと思われる。

金田一の知里真志保への期待は、『民族』に掲載された「山の刀禰濱の刀禰物語」の紹介文に現れている。金田一は「阿母さんの援助もあつたことであらうが、音の聞取りと、写し方と正確さ、これ程よくできる人が、同族のうちにあらはれたかと思ふと、幸恵さんの再来のように思えて」と記している。つまり金田一は、知里の姿にかつての知里幸恵を投影し、また期待もしていたと言えよう。金田一には、

この知里による「山の刀禰濱の刀禰物語」の二年前にまとめた『アイヌの研究』という著作がある。そこにおいてアイヌ研究の意義と目的について触れているのだが、「日本の国土の原住民」として、「アジアの古民族」として、「原始社会の生きた標本」として「特殊な価値がある」という（金田一 1924: 3-5）。そしてその具体的な研究方法として、自然科学的方法（外的研究）と文化科学的方法（内的研究）とがあり、文字をもたない彼らの精神的内面に触れることは容易ではなく、「実際彼等の中から物のわかった人間が出て来て自ら述作するのを待つ外、この方面の研究は、終にだめかと疑われる」という（ibid. :8）。唯一、「内生活に立入って其を測る所の尺度」が生きて話される言語であると主張するのである。このように「アイヌ学」を構想する金田一の前に現れたのが知里であった。

一方、喜田貞吉は、1930（昭和 5）年に亡くなった河野常吉の集めた資料や記録をもとに活発に研究を進めていた犀川会のメンバー、高倉新一郎、名取武光、犬飼哲夫、河野広道らとつながりをもっていた。喜田貞吉もまたアイヌ民族出身のアイヌ語研究者の到来を望んでいたとされ、森竹竹市や知里真志保に期待をかけていたという（藤本 1970）。喜田は結局、知里の父の高吉が知里の健康上の問題を理由に承知してくれないのであきらめたとされる。

喜田の周囲の意識については、知里が東京帝国大学文学部へ入学した 1934（昭和 8）年に刊行された雑誌『ドルメン』の中の高倉新一郎の記述から読み解くことができる。高倉は、この特集号において「北海道に於けるアイヌ研究家」という小論を寄せ、明治以降の北海道におけるアイヌ研究を掘り起こす一方で、この領域の研究の専門家の不在を嘆き、そして専門家の研究と、資料の収集と管理のためのアイヌの文化資料博物館の建設を主張している。注目すべきは一連の指摘の中で、アイヌ民族出身の研究者について触れ「アイヌ自身の研究家は未だ多く出て居ない。・・・中略・・・違星北斗も、金田一先生の助手だった知里さんも死んだ。唯知里眞志保さんに望はかゝつている」と述べている（高倉 1933:29）。

この『ドルメン』第二巻第八号には、大学に入学したばかりの知里も「アイヌ説話」を寄稿しているのだが、そこで自らの紹介する「アイヌ説話」をアイヌに輸入された「シャムウエペケレ：日本式説話」ではなく、「純アイヌ式に化した一例」として「なるべく原文に近く忠實に譯出して見ようと思ふ」と述べている。文頭に「求められたまゝに、何か少時の思ひ出といつたやうなものを書かうと思ひつゝも」とあるように、この時点での知里をとりまく周囲の期待には、金田一においても高倉においてもアイヌ民族の内面からの記述を行う者としての役割が知里に期待されていたとみることができるのである。

2．転機と研究への疑問

知里の一高そして東京帝国大学への進学には、金田一を通じての渋沢敬三からの支援があった。先に見たような知里を取り巻く周囲の期待には、姉知里幸恵の再来としての期待が大きかったのであろう。また事実、その期待へ答えようとする知里の心境も記されている。旧制一高に入学した後の知里は、1930（昭和 5）年に「アイヌ民譚」と「アイヌの昔話・夫婦同名」を雑誌『民俗学』に発表している。また東京帝国大学文学部に入学した 1933（昭和 8）年には「猿尾考」と「パナンペ放屁譚」を『郷土研究』に、「アイヌ説話」を『ドルメン』に発表している。精力的に地元での聞取りを通じて口承伝承の採録を行うとともに、アイヌ語を習得する知里の姿を伺うことができる。

しかし一方で大学の文学部英文学科で学ぶ知里の内面を突き動かす動きがあったのもこの時期であった。1933（昭和 8）年の『旅と傳説』誌上に掲載された深瀬春一による「ウェンベ・ブリ」に対する論駁として示された「ウェンベブリ？―本誌所収深瀬春一氏文を駁す―」をめぐる動きは、藤本英夫が詳細に掘り起こしている（藤本 1970）。それまでの採録された口承伝承をとりまとめたアチックミューゼアムから刊行された『アイヌ民俗研究資料　第一・第二』（知里 1936, 1937）と『アイヌ民譚集』（知里 1937）では知里のアイヌ研究に対する立ち位置の大きな変化が見て取れる。この過程において知里が自

覚せざるをえなかった意識とは何であったのか。

昭和10年2月18日とある『アイヌ民譚集』の後記に見られる知里の言説からは、二つの意識の芽生えを見て取ることができよう。一つは、「片手間に獲た所のアイヌ語の智識は謂ふところの「話し手の言語感情」なるものからは、未だ遠い所に在るのである」(知里 1937:166)、という、後に知里が繰り返し強調するアイヌの見方に立った言葉の解釈というものの祖型が見えてくる。

今一つの意識は、アイヌ文化に対する当世の無理解がアイヌ研究を行う研究者においても軽視できないくらいに存在するということへの気づきであったと言えよう。研究者の用いる「アイヌ」という言葉に、今を生きるアイヌの姿が乏しく、「消え行く者」「放つておくと消滅してしまはうとする資料を未然に防ぐ」という発言に見られる研究者の意識に対するある種の違和感を感じていたのではなかったか。知里は言う「「アイヌ」という概念は、厳密にこれを云ふならば宜しく「過去のアイヌ」と「現在(及び将来)のアイヌ」とに區別されるべきである」と主張する(知里 1937:164)。また知里のこの『アイヌ民譚集』の取り組みを「何人も追髄を許さないものである」と言いつつ、「今までで た吾々ストレインヂヤーの筆に成るものと、本質的に価値を異に」し、「吾々ストレンヂヤーに由つて歪められざる、純粋な話しての言語感情を知る為に」と評価する金田一の序文に対して、「矢張一般の先入観念によつて、不用意に歪められたお言葉である」と切り返している。

この二つの表現から云われなき差別と同化政策の中で「古びた傳統の衣を脱ぎ捨てて、着々と新しい文化の摂取に努めつつある」アイヌの人々を、研究者やジャーナリズムが野蛮性や未開性を助長し、差別を再生産しているのだと批判する知里の厳しい指摘を見て取れる。

3. 知里真志保の目指したアイヌ学の構図

大学卒業後の知里の著作には、互いに深く結びつつも大きく二つの方向性が示される。大学卒業の年の1935(昭和10)年に金田一との共著という形で『アイヌ語法概説』が出版されるが、このアイヌ語研究は、1940(昭和15)年に知里が豊原高等女学校に奉職するため樺太に渡った以降にアイヌ語の樺太方言の研究として多くの成果が蓄積されていく。この豊原時代の樺太方言の研究は、知里をアイヌ語学者として金田一の体系から離れて独り立ちさせた契機となったという田村すず子の指摘がある(田村1973)。

一方、この樺太での滞在は、後の知里アイヌ学の形成に重要な時期であった。樺太で知里は、豊原女学校で教鞭をとる傍ら、樺太庁博物館の民俗学部門の技術員として山本利雄(祐弘)とフィールドワークを重ね、一連の民族誌関連の仕事を残している。山本は後に知里の著作集の月報の中で戦後に開花した知里の「アイヌ学」が、この樺太時代の調査研究活動を「母床」としていたと回顧している。

1943(昭和18)年、知里は豊原女学校を退職し、北海道大学北方文化研究室嘱託となる。これ以降の知里の仕事は、言語学からアイヌ民族学さらにアイヌ文化の系統に言及するものへと広がっていく。

知里のアイヌ文化史の系統についての明確な発言は、米村喜男衛編の『北海道先史学十二講』に掲載された「言語と文化史」である(知里 1949)。すでに樺太において樺太方言の採録から、言語からみた系統性、言語年代学的可能性に気づいていた知里は、このモヨロ貝塚の発掘調査の中で企画された学際的な研究者たちの連続講演会に参加し、その中で自説を開陳する。

知里とモヨロ貝塚の調査への関わりは、終戦の年の金田一による網走方面でのアイヌ語調査への同行にあった。そこでモヨロ貝塚を中心としたオホーツク文化圏の先史文化の調査研究に私財を投資し、その人生をかけていた網走郷土博物館館長であった米村喜男衛と出会い親交を深めている。敗戦とともに日本の考古学会は、海外植民地でのフィールドを失っていた。戦後の考古学の活動は、1947(昭和22)年7月から9月の各学会の連合した「静岡市登呂遺跡調査会」による静岡の登呂遺跡の発掘と、同年9

月の戦前中国大陸を中心とした考古学調査を行ってきた東亜考古学会と網走郷土博物館による網走のモヨロ貝塚の発掘調査によって再開される。このモヨロ貝塚の調査に金田一が関与したことが知られているが（金田一が昭和２０年に詠んだ歌の歌碑が遺跡に残されている）、同行していた知里もまたこの調査に自らのアイヌ民族の系譜に関する仮説を抱きつつ関わることとなるのである。

「言語と文化史」の中で知里は、かつてアイヌ民族が「海の民族」であり、「北方から渡来した民族」であると語っている。その根拠として知里が指摘しているのが説話に現れる「皮舟トントチプ」であり、ゆりかごや赤子をあやす際のかけ声であり「ホーチプ、ホーチプ」を舟歌のかけ声であるという指摘である。これら舟に関する言葉からアイヌ民族において舟が広く文化や世界観に関わっていることを提示する。また日常的な単語の中にも北方起源の要素を指摘する。アイヌ語で「氷」をしめす「ルプ」が「融けるもの」という意味であり、ここから本来アイヌ民族にとっての水が凍って固まるものと認識されていたのではなく、凍っている状態が常態であり、融けていくものと認識されていることからアイヌ民族の北方性を説いている。さらにアイヌ語が川を内陸から海へ下るものと表現せずに海から山へ上るものと意識され、水源を「ペラトカ：川の行く先」表現することから見ても本来のアイヌ民族の生活基盤が内陸ではなく、海にあったことが推察できると主張している。

このようなアイヌ文化の系統論は、1958（昭和28）年から翌年にかけて『歴史家』に書かれた「ユーカラの人びとの歴史」においても繰り返されている（知里 1953, 1954）。特に「ユーカラの人びとの歴史」には、「北海道の先史時代の人と生活に関する文化史的考察」という副題が添えられており、ユーカラの成立年代、オイナを生んだ社会をシャーマン的酋長の支配する社会として描くなどのアイヌ史としての性格を強くする論考であった。

知里による一連のアイヌ史、アイヌ文化成立史ともいえる著作の背景には、当時の知里をとりまく研究者たちの存在が窺える。当時の北海道をフィールドとする研究者たちの関心は、明らかにアイヌ文化に集まっていた。モヨロ貝塚の調査を主導した東京大学の駒井和愛もこの調査以降「アイヌ考古学」という用語をいたるところで用いている。またこのモヨロ貝塚の調査には、北海道大学医学部の児玉作佐衛門、伊藤昌一、大場利夫が参加しており、北海道の先史文化とその担い手についての研究上の関心は、アイヌ民族論として学際的な色彩を帯びて活発化していた。当然のように学会の動きは、地元の研究者たちにも大きな刺激となり、知里を含めて、高倉新一郎、河野本道、更科源蔵らによって北海道郷土研究会が設立されている。

この時期の知里の著作には、考古学的知見の摂取が見てとれ、モヨロ貝塚の調査への参加も含めて河野らとの交流の中から得た研究上の刺激を見て取ることができる。この時期、知里自身の中でもアイヌ語研究を、明確にアイヌ文化を、そしてアイヌ民族史を知るための重要な道具として位置づけるという方向性が定まったと見なしえよう。知里のその思いは「言語と文化史」の最後に次のような文章としてあらわされている。「アイヌには文字が無かった。従って歴史もない、などとよく言われます。けれども彼等の言語こそ文字にまさる歴史ではないでしょうか。・・中略・・アイヌ民族の歴史を解こうとする時、アイヌ語の研究こそそれを解くもっとも貴重なかぎであると言いたいのであります」。

4．研究する者と研究される者

1950年代の知里の仕事は順調であった。1953（昭和28）年の『分類アイヌ語辞典　第１巻　植物編』の刊行と、翌年の『分類アイヌ語辞典　第３巻　人間編』の刊行、そして文学博士の学位取得と、正に研究者として順風満帆であったといえる。

しかし、研究が順調に進み多くの他領域の研究者との交流が進む中で、それまでアイヌ語の世界で感じていた研究者のアイヌ語への接し方、そしてアイヌ文化への眼差しに対して違和感を感じ始めたのも

この時期であったのであろうと思われる。

すでに樺太時代の1942（昭和17）年に樺太庁博物館叢書第五号としてまとめられた『樺太アイヌ』について資料の正確さ、不正確さを厳しく批判したことが指摘されている（藤本 1970）。1947（昭和22）年の「和人わ舟お食う」（『続随筆北海道』掲載）や1949（昭和22）年の「学問のある蛙の話」（『北海道大学新聞』）では、学者が不正確にアイヌ語を引用することへの厳しい批判が加えられていている。知里の他者の研究への手厳しい批判は多くの人々が指摘するところである。しかし、それはなぜであったのか。彼自身がアイヌ出身の研究者だからというのは、彼の真の苦悩を理解したとはいえないであろう。

思い出してみたい。知里の若き日の「ウェンベブリ？」の批判の文章の最後を。沙流川荷負の渡船場で出会った老婆の葬儀における自らの立場を通して訴えかけている。「最愛の肉身を奪われた悲しみの心」と「随筆や論文の材料にしようとして手帖に書き留める功利的な心」、「学問の為には凡ゆるものを犠牲にしてもよいといふ封建的な考え方が横行してゐる」ことを。「学者の心なき筆に傷つけられても、大多数の者は弱き者の常として泣き寝いりに終わらなければならぬ。果たしてこれでよいのであらうか」、「他人の心を傷けつゝ達する学問は無価値である。それは悪魔の学問ではないのか」、「粛然襟を正して、厳正無私、一字一劃も忽かにしない底の心掛が必要なのではなかろうか」という若き知里は強く訴えかけている。

知里の眼には、戦後の新たな学問のうねりの中にも未だ残される研究する者と研究される者の不平等さ、権威というものをかさにきた不誠実さ、そして今を生きている人々と深く結びつく研究対象であるにも関わらず繰り返される謙虚さと真摯さを欠如した研究の風潮に我慢ができなかったのであろうと思われるのである。

5．研究の倫理：「アイヌ研究を正しい軌道にのせるために」

知里による名著とされる『アイヌ語入門—とくに地名研究者のために—』は、方や多くの研究者や権威を鋭く批判していることでも知られる書物である。その中でこのような批判の真意として、「アイヌ研究を正しい軌道にのせるために」と知里は強く訴える。そこには、かつて師である金田一がアイヌ語の口承伝承を残す意義として唱えた「父祖伝来の民族的叙事詩をむざむざ滅させるのは惜しいものだから」という視点はない。「独力で地名解釈ができ、古代人の物の考え方にも通じて、ひとりアイヌ文化だけでなく、文化一般の理解にも大いに役立つ、という本を買いてみたいというのが私の念願であった。」という知里の願いは、生きたアイヌ語の普及であった。「川もまた、生物である」というアイヌ語を学ぶことで接近できる「内側からアイヌ語」を理解するためのアイヌ語、アイヌ研究の構築を知里は、確かに目指していた。

今、アイヌ民族をとりまく環境は、大きく変化している。近年の動きの中で最大の転機であるかもしれない。北海道においてこの地で育まれてきた歴史や文化そして言語、それを伝えてきた人々と関わる研究をおこなっている我々は、今一度、知里の言葉に耳を傾ける必要がある。今も彼は、きっと我々に問いかけているに違いない。「君は、アイヌ研究を正しい軌道にのせるために努力しているのか」と。

参考文献は省略した。